

私の思い、紙芝居で伝えたいこと

東日本大震災、原発事故で全町民避難になり、故郷を離れ、慣れない避難生活を体験しました。

浪江町のために何かしたい、出来ることはないのか？の思いが今、この紙芝居活動につながっています。

震災・原発事故から14年、薄れていく記憶を紙芝居を通し知っていただき、防災について、あらためて家族で話す、学校で話す、職場で話す、地域で話すきっかけになればと思います。

いつ、どこでなにがあるかわからない自然災害、他人事ではなく、自分事として考え、命を守る行動をしてほしいと願っています。

私の思い、紙芝居で伝えたいこと

紙芝居には、私たちが共に生きていく大切なメッセージがあります。

舞台が開いて作品が産声をあげ、演じては作品を深く読み取り、聞き手のワクワクする心を感じながら向き合う、一期一会の出会い。

舞台の扉が閉まり、物語が終わると自分の人生と重ね合わせたり、共感したり、涙したり、いろいろな感情が出てきます。

生きるということ、命の大切さ、自然のありがたさ、あたりまえはないということを紙芝居を通して、伝えていきたいと思っています。

紙芝居を使うことになったきっかけ、経緯

浪江町の桑折町仮設住宅にボランティアで来てくれた広島県の紙芝居作家(当時は広島市役所職員)福本さんが、心の支援をしたいと紙芝居を持って上演にきました。

広島は原爆が投下され何にも無くなってしまった。そんな思いを福島や東北にしてほしくないとの思いでした。

たまたまその仮設住宅に住んでいた語り部の佐々木さん(翌年死亡)から、原稿を預かり浪江町の昔話を作ってもらいました。

紙芝居を使うことになったきっかけ、経緯

私たちは県内バラバラになってしまった浪江町民の仮設住宅をまわり、昔話しの紙芝居を上演して歩きました。「懐かしなあ～」の声を聞き世間話をしたりお茶飲んだり笑ったりして少しずつ元気になる姿を感じてきました。

その後避難の苦労や家族の安否、故郷の思いを聞き、震災紙芝居ができました。

浪江消防団物語「無念」の作品が出来てからは、全国を回り各地で上演するようになりました。

紙芝居だからこそそのメリット、効果

紙芝居はいつでもどこでもどんな場所でも上演できます。

薄れていく記憶が紙芝居によって思い出し言葉をプラスしてお話ができます。14年が過ぎ震災を知らない子どもたちに伝える手段として、真実の話を紙芝居を通し想像しながら考えてもらうことができます。

読み手と聞き手の世界が一つになる瞬間を私は大切にしたいです。

浪江まち物語 つたえ隊

岡 洋子